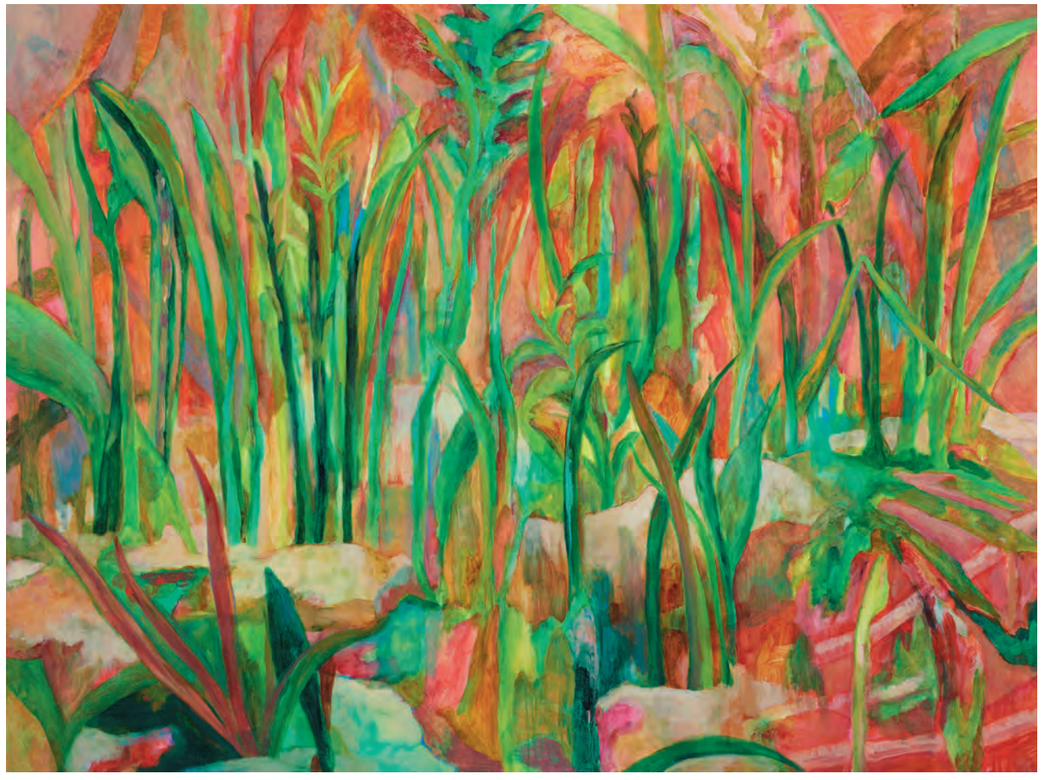
池上 惟
IKEGAMI, Yui

そこにある景色
The View There

日常の中にある、何気ない景色を描く。



ひろがる葉 / Spreading Leaves
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 194 × 259 cm

静かなところ / Quiet Place
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 227.3 × 181.8 cm

大渕 花波
OHBUCHI, Kanami

おばけのプラクティス
Ghost Practice

展示風景

展示風景

額縁と絵画の関係性を考えた時、美術展において展覧会場では額縁が必要とされますが、

図録では額縁は見事にトリミングされ必要とされません。

そのさまから私は額縁を“おばけ”という架空の存在に例えることにしました。

“プラクティス”とは、繰り返し練習するという意味です。“おばけ”たちは絵画と位置を反転することを繰り返し、練習しています。そして今回は、「額縁による額縁のための展覧会」を練習することとなったのです。

ぜひ論文と含めまして、額縁と絵画の関係性について再考していただければと思います。

おばけのプラクティス #24 / Ghost practice #24 / 額縁、アクリル絵具、ハトメ / 綿布
Frame, acrylic and grommets on cotton / 110 × 70 × 10 cm

おばけのプラクティス #25 / Ghost practice #25
額縁、アクリル絵具、ハトメ / 綿布
Frame, acrylic and grommets on cotton / 45 × 31 × 7 cm

展示風景

叶田 百恵

KANADA, Momoe

絵の中へ

Deep in the Painting

小さないきものと過ごす午後、お気に入りの歌を聴くと思い浮かぶ知らない風景。当たり前すぎて見過ごしてしまう事柄を拾い上げて、丁寧に見つめてみる。そして、新しい絵に出会う。旅は続く。

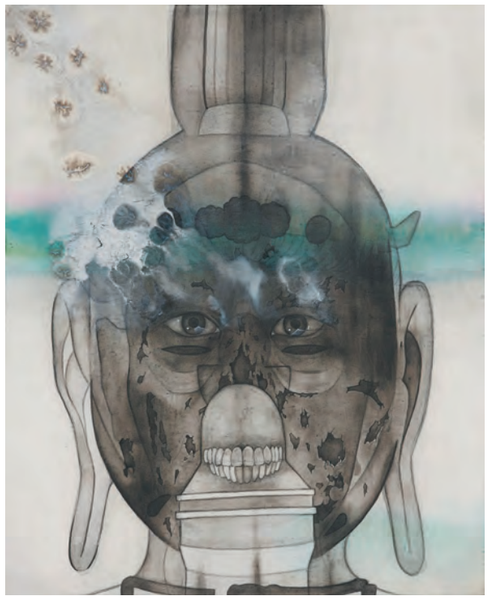
ある日 / One Day
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
227 ×180 cm

遭遇 / Come Across
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
230 ×180 cm

黒澤 宏太
KUROSAWA, Kouta

自身の絵画表現について
About my Painting

情報を共有しやすい現代社会で日々目にする物の中には、大勢の人間の意思が存在している。最近は、その目視出来ないコントロール出来ない「不確かな人間の意思の存在」に我々の生活は翻弄されていると感じることが多い。私は、意図しない様々な物が結合し形成されていく、特定の個人ではなく人々の間に存在する「人」をイメージして制作している。



透き通る / Transparent
アクリル絵具 / パネル/ Acrylic on panel
45.5 × 37 cm

F
アクリル絵具 / パネル/ Acrylic on panel
38.7 × 24.4 cm

breath
アクリル絵具 / パネル / Acrylic on panel
160 × 160 cm

胡 琪
HU, Qi

現代絵画における自律性―「再構築」観念の変遷過程について―

Autonomy in Contemporary Painting
About the Transition Process of the Idea of “Reconstruction”

望んでいたのは、すでに置き換えられていく全体性であったが、圧倒的な主体性のお導きを迎えていた。その「間」こそ、あらゆる不条理と矛盾が生起する場所である。

吊られた男 / the Hanged Man
油彩 / キャンバス
Oil on canvas / 220 × 300 cm

不条理 / Absurdity
アクリル、ペンキ / キャンバス
Acrylic, Aqueous paint on canvas / 330 × 700 cm

黄 湘怡
HUANG, Xiangyi

「中国の家と日本の家」家についての制作ノート
“China's Home and Japan's Home” Production Notes about the House

ドローイング / Drawing
火、パネル / Burnt Plywood
182 × 273 cm

芸術作品はずっと存在している。その時代ごとに作用は変わるだろうか？
芸術作品は戦争やテロを阻止できない。ウイルスに抵抗することもできない。
しかし、心を慰めることはできる。人々の心を少しの間、軽くするだろう。
これが芸術の価値なのではないだろうか。

ドローイング / Drawing
火、パネル / Burnt Plywood
182 × 182 cm

佐藤 菜々栄
SATO, Nanae

ナルシシズムと欲望の儀式
The Ritual of Desire and Narcissism

「美」とは、ナルシシズムである。
また、ナルシシズムとは、人間が霊性・聖性を獲得して、神的存在に至るための唯一の手段である。
同じポーズの石膏と青年たち、暖炉前での青年と顔の見えない相手、生首やマネキンのような格好で行われる、少年たちの劇(のようなもの)の支度―様々なシチュエーション・舞台装置の中で彼らが自惚れ、もしくは演じることで、「ナルシシズムと欲望の儀式」は行われるだろう。

屋敷探検I 磨硝子の扉 / Mansion Exploration I. Frosted Glass Door
油彩、鉛筆 / キャンバス / Oil and pencil on canvas / 194 × 162 cm

屋敷探検II 暖炉の間 / Mansion Exploration II. Fireplace Room
油彩、鉛筆 / キャンバス / Oil and pencil on canvas / 162 × 194 cm

屋敷探検III 化粧部屋 / Mansion Exploration III. Makeup Room
油彩、鉛筆 / キャンバス / Oil and pencil on canvas / 194 × 162 cm

白駒 多央
SHIROKOMA, Tao

しろこまたお 創作メモ —デジタル木版画—
Tao Shirokoma Creative Memos —Digital Woodcut—

hakobu hito -1.2.3.4
ミクストメディア / Mixed media
サイズ可変 / Variable size

私の近年の創作活動における主な思索主題は、“神話的物語性”、“現代的装飾性”、“デジタル木版画”という3つである。

これらの3思索主題は、全て版画的層構造という基礎・土台の上に成り立っている。

関口 美咲

SEKIGUCHI, Misaki

自由のための包括的な空間とある「状態」の肯定

絵画におけるその方法と可能性について

A Vibrant Space for Freedom and Affirmation of a Certain “State” About the Method, Possibility in Painting

世界は素晴らしいことと、その真逆の出来事は同時に存在する。同時に起きていることを肯定したいし、真逆の出来事に存在する居心地の悪さを取り払いたい。強さは強さのままで、弱さは弱さのままで成り立つ、包括的な空間について考えたい。

強さとは外側からの「何か」「出来事」を受け入れ変容できること、またそれらを自然と捉えられることであり、弱さとはどうしようもなさだ。変えることのできない、変わる必要のないものだ。それは決してネガティブなものではない。そのどちらも包括して存在できることが自由であることであり、個々がより活性化しながら、外側と接続し拡張していく包括的な空間になり得る。

修了論文では、フランク・ステラ、カタリーナ・グロッセ、ロバート・ラウシェンバーグ、ヨーゼフ・ボイスの4人の作家の仕事から学び論述し、自身の制作について述べた。

ないがしろにされるものが何一つ無くなってほしい。他者に対する想像が豊かになれば、世界はもっと優しくなる。関わりのない他者に対する寄り添い方を、石巻で出会った絵本作家の方から学んだから。

Elephant love ―積み重ねられた人々のための空間 / Elephant love ―Space for stacked people
ミクストメディア、ビニールシート、ベニヤ板 / Mixed media, vinyl sheet, plywood / 320 × 635 × 110 cm

カマキリ No.5 / Mantis No.5
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 225 × 225 cm

カマキリ No.4 / Mantis No.4
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 225 × 225 cm

CHEN Yimeng

古い物や画質の悪い映像などを見ている時に感じた「デジャヴュ (deja-vu)」のような気持ちから絵を描く。

覗き見るゴースト
Peeping Ghost

噴水のある部屋 / Room with a Fountain
油彩 / キャンバス
Oil on canvas
162 × 194 cm

鶴田 裕哉
TSURUTA, Yuya

身体と表現について
About the Body and Expression

自身の華奢な身体を鍛えていく中で、理想像へ近づくほどに未完成な部分へと目が行くようになった。変化していく自身の身体、それに伴うマイナスのイメージにも価値を見出し、表現した。

Balaclava
油彩、スプレー、ペンキ / キャンバス
Oil, spray paint and paint on canvas
291 × 386 cm

特日 格勒
TERIGELE

虚無に向かう“馬”の新絵画表現の探索
Exploring New Pictorial Expressions of “Horses” Heading into the Void

「馬」の様々な様相と精神を作品によって表現し、馬の外在のイメージをこのような精神的な虚無感で再表現にしようと考え、作品の創作と研究をしている。特に、現代社会において、馬が人間の生活から離れていき、その姿や印象が日々うすくなっていくような馬の虚無感を表現し伝えたい。

馬と都市の共存関係をテーマとして、作品をつくり、馬を伝統から解放するとともに芸術の面において新たな角度から認識したい。

無・馬 / Nihilistic・Horses

無・馬 / Nihilistic・Horses
油彩 / キャンバス / Oil on canvas
227.3 × 100 cm (2点)
発泡スチロール、毛糸 / Styrofoam and wool
170 × 35 × 140 cm

友行 優
TOMOYUKI, Yu

物質的要素を含む絵画について
Paintings that Contain Material Elements

シャガール「街の上で」

この絵がとても好きだ。

彼の絵を見るたび、これほど幸せで悲しい絵はないと感じる。
今ある時間が愛おしくて仕方ないと、その時間を囲っておきたいと思うと同時に、
どこかに漂って消えてしまうものだと知っているんだと、絵が言っている様なのだ。

彼は最愛の恋人と街の空高くを飛んでいる。
天にも登りたいと、シャガールは空を飛び、恋人を連れ去ろうとしている。

しかしなんだか、何かから逃げている様だ。
それにどこか飛びきれない、引き留められている様な気配がある。

彼は自ら、留まっているのか。

それとも何かに、掴まれて振り払えないのだろうか。

夢でさえ空を飛びきれない。
だがここにある幸せも、かけがえのない物だと、彼は大事に抱きしめている

マルクシャガール / 街の上で
Marc Chagall / Over the city
ミクストメディア / Mixed media
320 × 300 × 300 cm

中尾 江利

NAKAO, Eri

退屈な大学のアトリエから、路上にとび出したかった。

I've Wanted to Run out into the Street from my Boring University Studio

The subversive stitch
油彩 / 布、丸棒 / Oil on cloth and wooden poles / 180 × 370 cm

タイトルの《The Subversive Stitch》は、フェミニズム美術史家ロジカ・パーカーの同名の著作からとっている。彼女は「些末で非創造的にして、非政治的なもの」と捉えられてきた刺繍に焦点を当てた。女性が家庭内で営んできた針仕事は、男性中心主義のアート界では軽んじられてきた。しかし、ロジカはこう書く。

「女性が作り出してきたものには、いつの時代にも反体制のメッセージが隠されている」

だから、《The Subversive Stitch》、つまり《反乱するひと針》なのである。

デモに参加し始めるようになった2017年以来、どんな絵画よりも、芸術家ではない人がつくって抗議行動に持ちよるプラカードや幟の方がずっと好きだ。私にとって良い芸術家とは路上にいる無名の人たちである。

自分が描いた絵をデモに持っていって「プラカード絵画」と呼んでみたりもした。どうにかして、閉鎖的な大学のアトリエから路上にとび出したかった。

私がかねてから作りたいと思ってきたのは、2018年3月8日のウィメンズ・マーチで見かけたパッチワークである。柄物の布を組み合わせた横幅3メートルほどのそれを複数人の女性が持って歩いているのを見て「これこそが自分が作りたいものだ」と確信した。

2020年という時代はパンデミックの時代もあり、プロテストの時代として記憶されるだろう。殺されてしまったジョージ・フロイドの動画を、食い入るように見た。彼が最期に残した“I can't breathe(息ができない)”という言葉をマスクに書き殴って人種差別に抗議する人たちも。日本でも「#検察庁法改正案に抗議します」や「#自粛と補償はセットだろ」などのハッシュタグアクティビズムが次々と起こった。香港国家安全維持法が制定された香港では、ガスマスクで顔を守りながら抗議する人がいる。タイの若者たちも、民主化のために3本の指を突き立てる。東欧では人工妊娠中絶の権利を奪う動きが広がり、南米ではフェミサイドに抗議する女性たちが路上で歌う。

「ソーシャル・ディスタンス」や「分断が広がっている」という言葉がしきりに降ってくる中でも、人は集まり、組織し、抗議することをやめない。私は、パンデミックで割れきったこの世界の片隅から、反乱する人びとと共にあろうとしている。

諾 敏
NUOMIN

あたたかいについて
About Warmth

雪の中 / In the snow
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 162 × 132 cm

雪、風、雨についての作品である。雪が降った後、真っ白い世界に仲間とこの雪の大地に横になって空を見上げていた記憶。つまり新鮮な、冷たい空気と暖かいである。生活にいつも悩み、孤独があるが、暖かい平静もある、風が吹くとはっきりになる。雨が降る時のにぎやか、激しい音が止んだ瞬間に世界が静かすぎる。

風 / Wind
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 227× 181 cm

雨が止んだ / The rain has stopped
油彩 / 木、蠟 / Oil on wood and wax / 190 × 130 × 100 cm

林 京平
HAYASHI, Kyohei

家
Home

私は個人的なことや身近なこと、家族、家について制作活動をしてきた。 その活動から、家と外、人、それらの全てが同時に存在するような空間を模索した。
《Roma》(2018) という映画を見た。 コロニアローマを舞台に、アルフォンソ・キュアロン監督本人の半自伝的な家庭の暮らしが描かれ ている。
映画の中で、家庭の時間と、1970年代の激動のメキシコの時間とが関わる世界は、ある種の雑多さをもち、それこそが魅力で、全ての存在が分けられることなく同じ時間を生きて いることを感じた。
時代の出来事と無関係に、
家族や家が存在しているのではなく、
確かに今を、生きていることを、絵画空間に表現した。

相楽兵衛門の寝室 / Hyouemon Sagara's bedroom
プリント / 光沢紙 / Print on glossy paper / 72.8 × 103 cm

黄色の家 / Yellow home
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 195 × 780 cm

八木 美花
YAGI, Miharu

絵画をつくる
Paint Pictures

ドーナツの穴は描けなかったので、代わりにパンの部分を描いた。
それらがドーナツの余剰部分であり、「穴」をつくり出すことこそが彼らの役目なんだと知った。
わたしはひっそりとこの「余剰部分」を、「ムード」と呼ぶことにした。

ソング・マシン / Song Machine
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 18 × 14 cm

ディスコ・ダンサー / The disco dancer
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 18 × 14 cm

ベリー・ナイス / Very nice
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 14 × 18 cm

ソフト・スポークン / Soft Spoken
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 18 × 14 cm

山口 美衣奈
YAMAGUCHI, Miina

越境
Cross Border

修了制作について

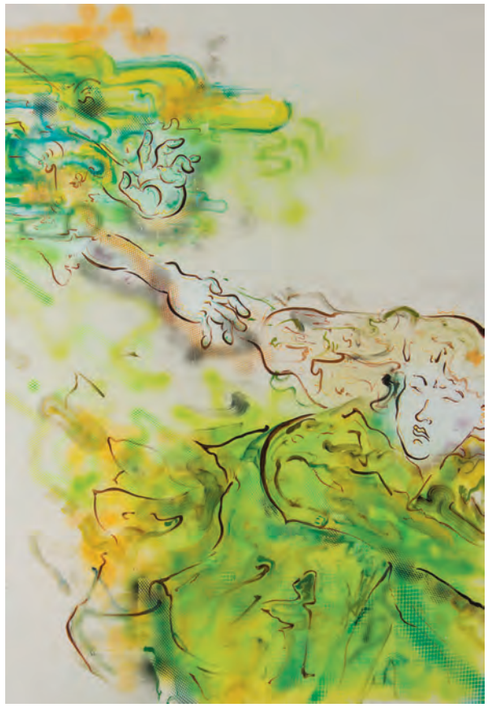
―線を引くという行為―

何かを示すために描かれた線、何かを消すために描かれた線、何かの痕跡による線、描く事によって引かれた線と、自分または第三者によって無意識に残った線。
線を引くという行為に境界線はあるのだろうか。
道端の壁はいろんな人や、物や、事象によって引かれた線がいくつものレイヤーになって重なっている。
それらはまた一つの画面の中にある事により、その線がどの様に生まれたのかが不透明になり、同じ画面の世界に存在する。
物事と物事に橋をかけるように線を引く

―真っ白なステージ―

絵を描くために用意されたキャンバスという張り詰めた真っ白なステージ。どこに行っても絵画という同じ形を保ち続けるパワーをもった大きなステージ。
それをずっと避け続けそれが自分の中の1番大きな抵抗になった自分のコントロールが効かない素材と対峙した時にどんな世界が生まれるのかがみたい。
多摩美に入って初めてキャンバスに油彩をのせた。
四角の中に線を引く行為や痕跡が蓄積されてゆく。

変わらないと思っているもの
それは少しずつ、確実に時を刻み己のリズムで変化し続けている
とても早く とても遅く どこへ行っても進み続ける
誰が気付こうが気付くまいが 今もあなたが気づかぬうちに

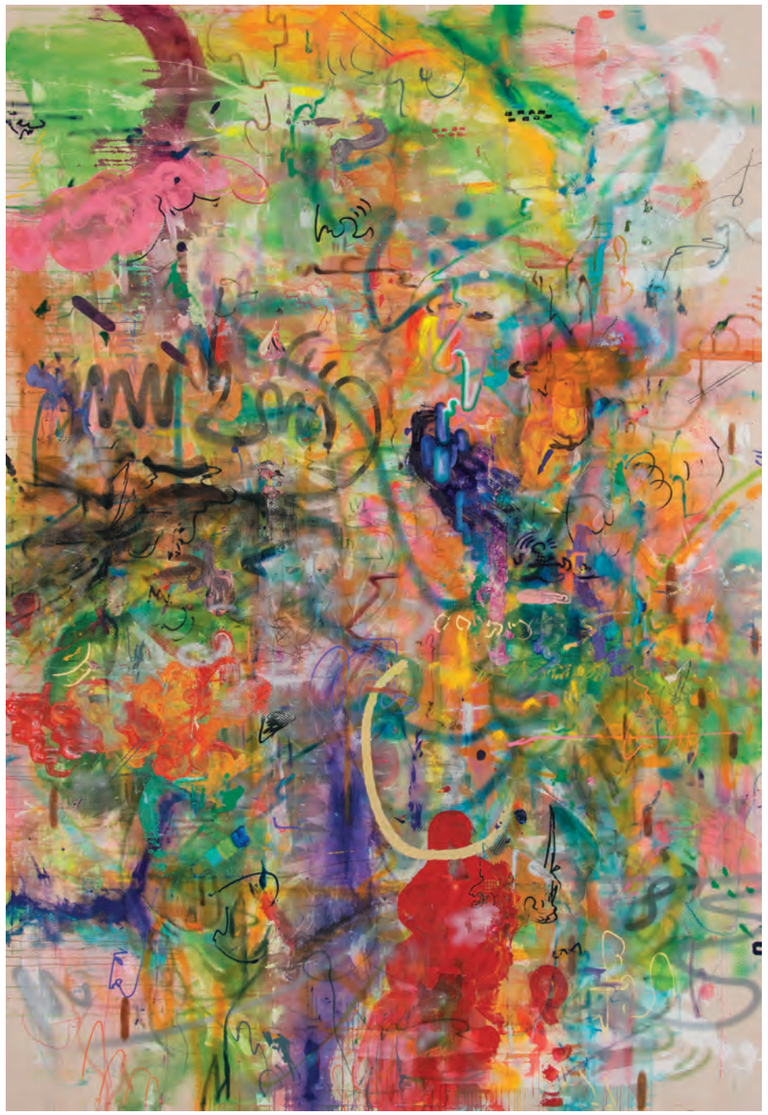


めぐりめぐって / What goes around, comes around
油彩、アクリル、スプレー / キャンバス
Oil , acrylic, spray paint on canvas / 190 × 130 cm

Everything stays, but it still changes
ミクストメディア / Mixed media
サイズ可変 / Variable size

修了論文について

T.C.Cannonというアメリカンインディアンのアーティストにフォーカスを当てながら現代のアメリカ社会の中でのアメリカンインディアンについて論述した。
キャノンはアメリカ以外の国では殆ど知られておらず、今回の論述が日本語文献初のキャノンの資料となる。
我々は、日々アメリカ文化を摂取して生活をしている。意識的にも、無意識的にもそうである。
しかし、我々はアメリカ大陸の文化や歴史を知っているだろうか、今の姿になる前のアメリカ大陸を知っているだろうか。
本文ではキャノンの作品や彼自身の葛藤、アメリカンインディアンの歴史などを通して論述している。
自分自身が文化、人種間の強い境界線に立たされながらも広い心と探究心を持ちながら表現というものの境をも越えて生き続けたキャノンを多くの人に知って欲しいと思う。



それでも自分の道を進む Pluto / Pluto still keeps its own way
油彩、アクリル、クレヨン、スプレー / キャンバス / Oil , acrylic, crayon, spray paint on canvas / 330 × 220 cm

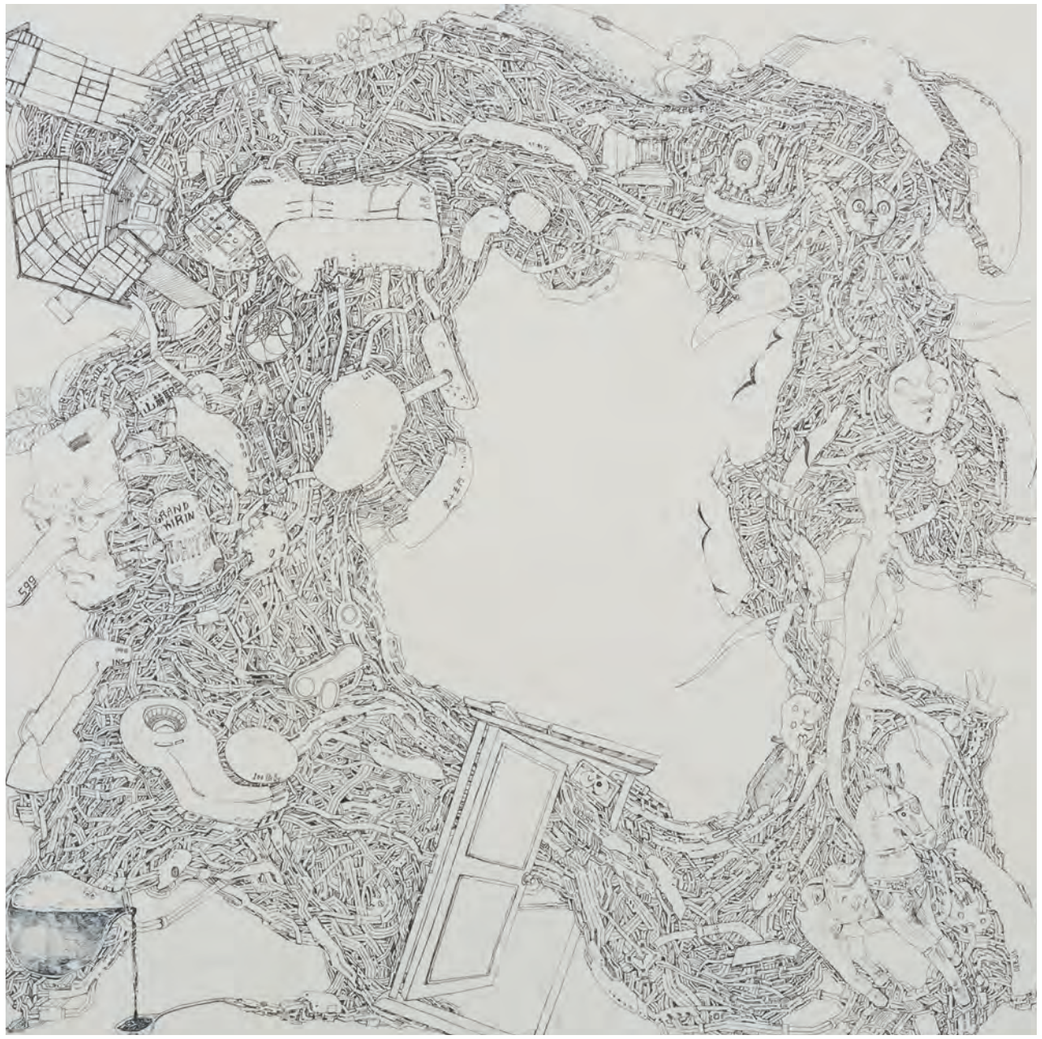
山根 広嗣
YAMANE, Hiroshi

意識と無意識
Consciousness and Unconsciousness

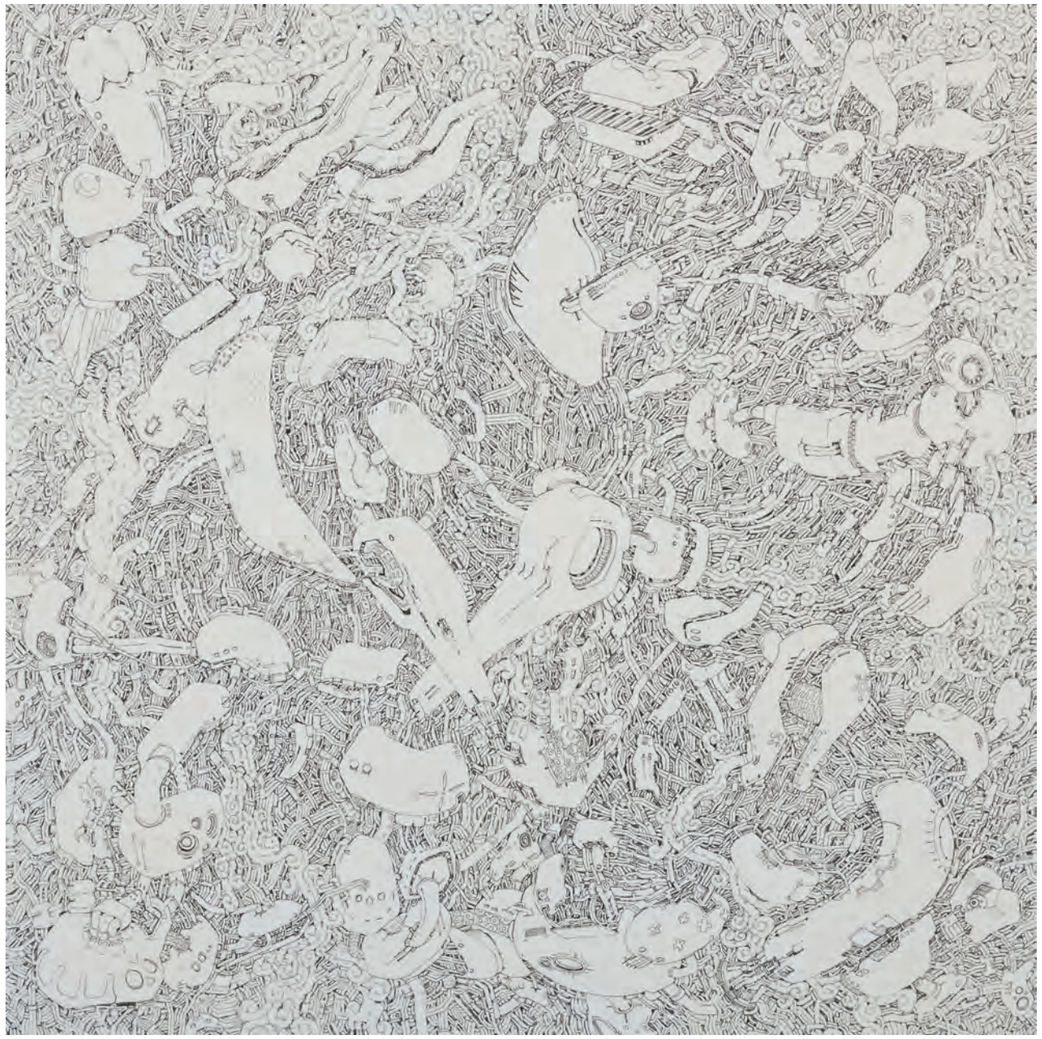
平面作品を通してひとつの世界を作り続け、私は私の中の世界観はどこからやってきたのかが疑問だった。無意識のうちに自分の中にあって知らない間に出来上がってきた基盤のようなものがあった事に私は疑問を感じた。

自分自身でも預かり知らぬ内に出来上がったもの、影響を受けて良いと感じたものについて興味を持ち、現在の「意識と無意識」というテーマに行き着いた。

作品作りにおいての根幹の部分には「無意識」というものがあり、創作の創出点であると考えている。



I am
ペン / パネル、布 / Pen on panel and cloth / 91 × 91 cm



イヤーワーム / Earworm
ペン / パネル、布 / Pen on panel and cloth / 91 × 91 cm

山本 清響
YAMAMOTO, Kiyonari

絵画と受肉
Painting and the Incarnation

日本の油彩絵画の歴史において絵画の受肉性というものは殆ど考えてこられなかったように思われる。絵画がそれ自体で受肉的であることとは、制作者の行為性を訴えるための単なる物質性を指すのではなく、画面を油絵具によって覆っていくことのうちで、「油を注がれた」ものへと時間的に立ち返ることによって初めてそこへと方向づけられるところの在り方である。言い換えれば、絵画は言葉［logos］の受肉として、自らを見えるようにさせるところのものである。

Landscape (yellowish brown-green-brown-brown)
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 91 × 73 cm

感官-沈黙-藉身 / Sense Organ-Silence-Incarnation
油彩 / キャンバス / Oil on canvas / 194 × 162 cm / 53 × 45.5 cm

吉山 明恵
YOSHIYAMA, Akie

時間
Time

余音＝余韻。テーマは地上の時間である。水や風などの時々刻々と姿を変えるものたちが、うつろいながら時代を超え、途方もない歳月を過ごす、そのあいだの記憶や感情を画面に収めた。下地に白亜地を用い、テンペラと油彩の混合技法を用いた。イメージのベースは「日常の中で目にした光溢れる動的な印象」にあるが、構成についてはカンディンスキーの影響が出ている。「この星で待つ」は生命樹と木の亡霊という相反する像を掛け合わせたものだ。宙に線を引き、虚ろな像を描き出したい、という衝動から制作した。

この星で待つ / Waiting on this planet
石膏、針金、粘土 / Plaster, wire, and clay
183 × 240 × 93 cm

地上の余音 I 漣は記憶を負うか
Afterglow I Does a ripple have a memory ?
油彩、テンペラ / キャンバス
Oil and tempera on canvas / 130.3 × 194 cm

地上の余音 II 風は記憶を負うか
Afterglow II Does a wind have a memory ?
油彩、テンペラ / キャンバス
Oil and tempera on canvas / 130.3 × 194 cm

地上の余音 III 霧は記憶を負うか
Afterglow III Does a fog have a memory ?
油彩、テンペラ / キャンバス
Oil and tempera on canvas / 130.3 × 194 cm

劉 静宇

LIU, Jingyu

現実の色を持った世界と白黒のインターネット世界に対する私の考え

Think About on the Real Color World and Black and White World on the Internet

人間失格 / No Longer Human
砂、スプレー、アクリル、油彩 / Sand, spray paint, acrylic and oil / サイズ可変 / Variable size

「人間失格」という作品は人影とネットワーク上の様々な画像、枯れた花をモチーフとし、ワイヤーにつながれた30cm×40cmの板70枚で構成されています。これはキーボードを表していますが、規格化されているはずのキーボードは負の感情の表出や他人を攻撃するのに利用されているため、大きく歪んでいます。

キーボードから生み出されるネットワーク上の情報は、主観的で自意識に溢れ、そこでは他人の痛みや感情、現実の生活は顧みられず、目の前の花が枯れていることにも気がつきません。残っているのはキーボード上に踊る虚しい文字だけです。

私の作品のテーマは、ネットワークにより他人といびつな結びつきを持った現代人の生活です。

海の葬式 / Funeral of the Sea
砂、スプレー、アクリル、油彩 / Sand, spray paint, acrylic and oil
1000 × 150 cm

海の葬式という作品は、夢の葬式でもあります。ネットワークは現実と虚構が共に存在する海です。作品の中の光と影は生死の輪廻を表現していて、現実と幻の間の矛盾と調和を共に描こうとしています。

右側の光の部分は女の姿、左側の影の部分は骸骨の姿、男の顔のようになっています。

飯島 ひかる

IIJIMA, Hikaru

私の作品について

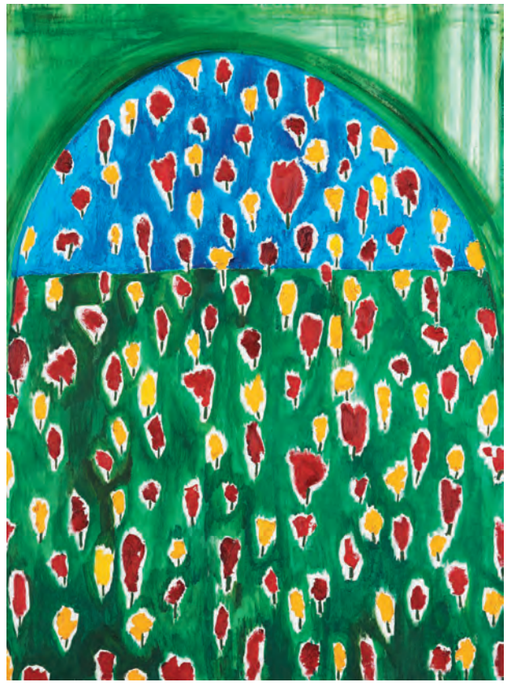
個人的な体験を「装飾」するということ

About My Art Works —Decorating My Personal Experiences—

私の作品に登場するモチーフは幼少期の記憶に基づいています。

祖母が作ってくれたワンピースのフラワープリント、当時住んでいた家のタイル、お湯が緑色にゆらめくバスタブ、くるまって遊んだカーテン、ベランダで育てていた植物。

それらを装飾的に描くことで、かつてネアンデルタール人が死した仲間に花を手向けたように、思い出に親愛の気持ちを伝えることができるのではないかと考えています。



小さいものを拾う
I pick up trivial things
ミューグラウンド、油彩 / 綿布
Oil paint and μ-Ground on cotton
200 × 250 cm, 145.5 × 112 cm, 130.3 × 97 cm